

農的デザイン研究所代表

蔦谷栄一氏

福島県南相馬市に住むKさんご夫妻に、震災の現場をご案内いただいた。復興が進みつつあるとはいえ、その傷痕は大きく深い。復興までの道のりはまだまだ遠いようだ。



こうした中で、一筋の光明が差しているように感じられてうれしかったのが、この地での報徳仕法との出会いである。

二宮尊徳には幾人もの弟子たちがおり、報徳仕法によって各地で財政再建や地域復興に大きく貢献してきた。その一番弟子ともいえるべき高弟が相馬中村藩藩士・富田高慶(いっけい)であり、南

南相馬の復興支える力 今も息づく報徳仕法

相馬市にある高慶の墓に足を運んだ。そこには戊辰戦争から逃れて当地に移住した尊徳の子・尊行とその家族の墓が並ぶ。富田高慶が家老の草野正辰や池田図書らと共に報徳仕法に着目したのは、相馬中村藩の立て直しを図るためだった。天明の飢饉(ききん)により、人口が3分の1にまで減少し、田畑は荒廃。財政も逼迫(ひっぱく)して窮地に追い込まれた。対策として取り組んだ一つが報徳仕法であり、もう一つが富山など北陸からの浄土真宗門徒の移住である。この二つの対策が相まって、相馬中村藩は見事に復興を果たしたのであった。

それから200年以上が経過し、3・11の大地震・大津波、そして原発事故によって、相馬の地は再度窮地に追い込まれることになった。この時、富山県からたくさん

の浄土真宗門徒の人々が復興支援に当たったという。そして富山県南砺市の浄土真宗大福寺住職・太田浩史さんが、南相馬の復興のためには報徳仕法への取り組みこそが欠かせないことを、被災現場を歩きながら説いて回っていることも知った。

報徳仕法に取り組んできた地区とそうでない地区とでは、農業・農家が持つ活力も大きく違うという。またKさんたちは、若い頃に報徳仕法をテーマにした民謡ミュージカルを仕立てて何回も上演したこともあったそう。今でも農村部では、年配者が中心ながらも、報徳仕法についての学習活動が盛んに行われている地区もあるという。

この地では報徳仕法が今も息づいている。天明の飢饉を乗り越えてきた報徳仕法が大きな力となって、南相馬の復興が少しでも早く進んでいくことを祈りたい。

(今回は19日付)